

ハウレンソウケナガコナダニ

1 形態と生態

- (1)ハウレンソウを加害するコナダニ類は数種類が知られていますが、主要種はハウレンソウケナガコナダニです。本来は土壤中に生息する有機物分解者で、有機物や有機物に発生する糸状菌を食べていますが、近年、有機質資材を積極的に活用した栽培で農作物への被害が多く見られるようになりました。
- (2)土壌表面から深さ 5 cmまでの層に多く生息し、形態は体長 0.3~0.7 mm程度の楕円形、体色は光沢のある乳白色で後胴体部に長い毛が生えています(写真1)。
- (3)発生適温は 20℃前後ですが、産卵数は 10~15℃で多くなります。また、低温に強く、7℃以上あれば成長することができますが、高温には弱く、25℃を超えるとふ化率が低下します。

2 被害の様子

- (1)土壌中で増殖した本虫がハウレンソウの新芽部分に侵入し食害します。なお、土壌中からハウレンソウへの寄生は4葉期頃から増加し、被害は8葉期頃から急増します。
- (2)本虫は施設栽培で密度が高まる傾向があるため、低温時の施設栽培では大きな被害が生じることがあります。
- (3)食害により、葉に小さな穴やこぶ状の小突起が生じ、正常に展開せず、光沢を帯びた奇形となります(写真2)。
- (4)被害が激しい株は、葉が縮れたようになって褐変し、芯止まりとなり生育が抑制されます(写真3)。
- (5)土壌中の生息密度が高い場合には、幼芽を食害し、発芽障害を起こすことがあります。
- (6)ハウレンソウの他には、コマツナ、キュウリ、カボチャ、トウモロコシでも被害が多く見られます。



写真1 ハウレンソウケナガコナダニ



写真2 葉の奇形



写真3 株の芯止まり

3 発生について

- (1) 概ね平均気温が 20℃以下になる秋から春にかけて土壌中で増殖します。
- (2) 乾燥しやすい場所で発生が多くなります。
- (3) 生息密度は露地では少なく、施設内で多い傾向ですが、露地でも連作や施設内での未熟な有機物の施用により発生が増加します。
- (4) 被害株を放置すると、発生が著しく助長されます。

4 防除時期と防除方法

(1) 耕種的防除法

- ア 稲わらや家畜糞堆肥等の未熟有機物は増殖源となるので、十分腐熟させてから施用する。
- イ もみ殻は、堆肥に混ぜて堆積しても腐熟が遅いため、増殖量が低減されないので使用しない。
- ウ 前作の残さや間引き株は増殖源となるので、これらを栽培地の外へ除去する。
- エ 熱水土壌消毒(処理温水量 1 m²当たり150L、湯温 80℃以上)を行うと4ヶ月程度発生を抑制できる。
- オ 蒸気消毒、太陽熱消毒、土壌還元消毒は、処理後 1~1.5 ヶ月程度発生を抑制できる。
- カ は種前後の土壌水分を適正に保ち発芽を均一にする。
- キ 立性の品種を選択する。

(2) 薬剤防除

- ア は種前に登録のある土壌処理剤を施用し、土壌中の密度を低減する。
- イ 生育期の薬剤散布は、土壌から株へ移動する前に行い、新芽付近に十分薬液がかかるようにする。
- ウ 施設栽培では、天敵農薬を発生初期に放飼する。
なお、その場合には活動適温等、天敵の特性を十分に理解の上、放飼時期や温度管理に留意する。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

- 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会
- 問合せ先(原稿執筆)
埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409
埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県